

方法論についてのノート

二十世紀の変わり目、若い黒人の女たちはその叛乱を公然たるものとした。束縛されぬうつくしい生をつかみとろう、この先に待ち受ける新たな苦役の形態から逃れよう、自由であるかのように生きてみよう、そうして女たちは抗った。本書では、彼女らの目を通して世界を語ることで、そのラディカルな空想と奔放な実践をふたたび創りだすことを試みる。これは名の知れぬどこから書かれた物語。ゲットーというどこでもない場所から、ユートピアというどこでもない場所から書かれた物語。

有象無象の群衆や収奪されたものたち、いわばサヴァアルタンの歴史を書こうとする歴史家は誰であれ、アーカイヴの権力、権威との格闘を余儀なくされる。すなわち、なにを知ることができるのか、誰の視点に重要性が付与されているのか、歴史の行為者としての重責と権威を授けられるのは誰なのかなど、アーカイヴによって限界づけられている制約との対峙を迫られるのだ。奔放なものたちの記録を記すにあたつて、都市部における日常の経験とその息つく間もないような生活を表象するために、膨大なアーカイヴ資料を利用した。そこに響いていたはずの声を再創造し、可能な場合は若い女たち自身の言葉を用い、その生の親密な局面に身を沈めた。そうしたのは、都市部における肉体的、感覚的な経験を伝え、黒人の社交空間にあつた多彩な景色をつかむためである。そんな目的のためにわたしが採用したのは、近密な叙述というモード、つまり奔放なものたちのヴィジョンと言語、そしてリズムがテキストそのものを形成し、脚色するように、語り手と登場人物の声を不可分の関係のうちに位置づけるというスタイルだった。イタリック体のフレーズや文章は、そんなコーラスから響く発話

である。これは、サークルの内側から語られる物語なのだ。

本書の登場人物と出来事は、すべて実在のものである。創作はひとつもない。女たちの生についてここで書かれていることは、次の資料から選り抜かれた。家賃集金人の日誌、社会学者の調査書や論文、裁判記録、スラムの写真、風紀取締官やソーシャルワーカー、保護観察官による報告書、精神科医や心理学者との接見記録、刑務所の事件記録。これらの資料はいずれも女たちを問題として表象している（守秘義務の遵守、および州アーカイヴズ利用上の規定のために、いくつかの名前は変更されている）。若い黒人の女たちを監視や逮捕、処罰、および収監のもとにおくことになった価値判断の基準や分類法から解放された対抗的な物語を手探りで創り、みだらでわがまま、不逞で奔放として描写されることの多かった人びとによって立ち上げられたうつくしい実験の数々——すなわち生きることそのものを芸術とする実験——を証し立てる、それが本書の企図である。ここで試みられるのは、これらの生に潜行していたはずの叛乱を取り戻すこと。事件記録から叛逆を掘り起こすこと。倒錯者や犯罪者、異常者呼ばわりされた女たちから、奔放さと拒否の態度、相互扶助、自由な愛を解き放つこと。母であることの自由（生殖にかかわる選択）、婚姻という制度の外部にある親密さ、そしてクイアで法外な熱情を認めること。これまで等閑にされてきただけでなく思考することすらほとんど不可能だった、どこにでもある黒い女たちのラディカルな想像力と日々のアナーキーを照らし出すこと。

『奔放な生』では、アーカイヴ文書の細部に分け入り、増幅させ、移調し、そしてこじ開けようとする。そうすることで、二十世紀における黒人の社交関係を変貌させたあの激動についての、より濃密で鮮明な情景を描出することができるとも思えないかと思っている。その企図とは、若い女たちが理解し、経験したように世界を理解し、経験することであり、その知に学ぶことである。本書は、奔放な

ものたちによる逃亡のテクストとして考えたい。それを特徴づけるのは逸脱、道を外れることである。そうした精神に則り、わたしは事件記録や文書の限界を押し広げ、起こったかもしれないことについて推察し、真つ暗な寝室で囁かれたことを想像し、ためらいと逃走、可能性の瞬間を、奔放なものたちの夢とヴィジョンが可能なように思えた瞬間の数々を、敷衍した。

今も昔も、若い黒人の女たちを性的なモダニストとして、自由愛者として、ラディカルとして、あるいはアナーキストとして認識する人は少ない。フラツパー²がゲットーの女の子たちの白い二番煎じに過ぎないということも。彼女たちが顧みられることは、これまでただの一度もなかった。重々しさのかけらもないあまりものの女としてあり続け、歴史にはふさわしくない女の子と認識され、とるに足らぬ存在となることを運命づけられて。もつとも、本書は一連の異なる価値基準に依拠しており、なんの変哲もない日々に命を与えていた革命的な空想を諒解しようとする。その奔放さと統治されることの拒否に宿っていたユートピアの渴望と未来の約束を、この本は追い求める。

本書において選り集められたアルバムは、法の外に置かれたものたちのアーカイヴ、もうひとつの方法で存在するための夢の書。^{ドリームブック}この女たちの生の瞬間に立ち会うことで、想像だにしなかった二十世紀の物語が浮かび上がるだろう。ブラック・ラディカリズムについてのきわめて親密な年代記が、黒い女の子たちの美的で暴動的な歴史、およびその自由の実験が——ギャッツビーに先んじた革命が。ほとんどの場合において、このような女たちの生活——世界についての歴史とその潜勢力は、考察の

1 本文中で書体を変えた。

2 一九二〇年代のアメリカで、従来の道徳、性規範にとらわれずに自由で放埒な生き方を模索した若い女性たち、そのライフスタイルやファッション。

埒外におかれてきた。なぜなら、あの時代に生きた若い女たちの社会的行為の先駆性、およびその革新性を、誰一人として受け止めることができなかったから。一八九〇年から一九三五年という時代は、それからの黒人の未来を決定的に定めた。都市部においては短調の革命が展開されており、その担い手はほかならぬ若い黒人の女だった。たしかに黒人の親密な生の激変、もしくは変質は、経済的排除や物質的欠乏、人種の囲い込み、そして社会的収奪によってもたらされたものだったのだろう。しかし、同時にそれは、未来の展望とありうるかもしれない世界によつて焚きつけられたものでもあった。若い黒人の女たちは、もうひとつの生のあり方をたゆみなく想像し、もうひとつの世界について思考することをやめようとしなかった、ラディカルな思想家なのだ。本書はそんな不逞な着想によつて、熱を与えられている。